

(会期二〇二二年九月十一日～十一月十四日)

年中行事とは、毎年特定の月日にくりかえして行われる行事のことで、月の満ち欠けや季節のうつろい、農作物の成育などにあわせて行われます。

また、むかしは一年の仕事のほとんどが手作業でおこなわれ、作業の節目ごとに身体を休めたり、時にはぜいたくをしたりする日を大切にしました。このような普段とは異なる日を「ハレの日」といい、新潟では「モンビ物日」「アスピ(遊ぶ日)」などともいいました。

日本の年中行事の多くは、農耕や漁業といった人びとの生業の順調な進行や豊作を祈ることを起源とし、家ごとまたは地域ごとに様々な行事が行われます。今回のくらし展では、新潟のくらしを年中行事から紹介します。

稲作が盛んな新潟市域では稲作と結びついた行事が数多く行われてきました。昭和三十年代の江南区域の農村を例にあげると、三月末頃から田を耕し、五月下旬から六月上旬にはサツキ(田植え)を行いました。この間、田仕事をはじめ前の三月十六日には、神様が田に降りるのを迎える「田の神さま(田の神下がり)」といわれる行事が、四月から五月にかけて集落の神社では今年の豊作を祈る春まつりが行わ



西蒲区稲島の田の神上がり (巻郷土資料館所蔵 1979年撮影)

れました。また、稲刈りが行われる秋には、八月から九月にかけて今年の豊作を祝う秋まつりが行われ、米の出荷作業がおわる十一月十六日には神様が田から去るのを送る「田の神さま(田の神上がり)」が行われました。そして、新年になり小正月(小年)といわれる一月十五日頃には、今年の豊作を祈るため、小さく切った餅やだんご、せんべいなどをシイやケヤキ、ダンゴの木などの枝にさして飾る「マユダマ飾り」が行われました。これは、稲に穂がたくさん実った様子を表現しており、飾ることを「サツキ」と、また片づけるこ

とを「稲刈り」という地域もあります。展示では、このような稲作の過程やその間行われた農耕儀礼を写真などで紹介します。

他にも、さまざまな年中行事が行われており、なかには現代と異なるかたちで行われている行事も多くあります。例えば、三月三日に女兒の成長を祈る「三月節句」は、現在では多くの家で雛人形を飾り、菱餅やあられ、ちらし寿司などを食べます。しかし、むかしは雛人形を飾る家はほとんどなく、菱餅をつくり仏壇や神棚に供えるのみでした。現在と比べると簡素に思えますが、多忙な仕事とつましい日々のくらしの中では特別な日でした。

また、神仏に関わる行事は宗派により違いがあります。盆を例にあげると、新潟市内で最も多い宗派である浄土真宗では、先祖の霊魂は現代に存在しないとの教えから、墓参り以外に特別なことは行いません。一方、禅宗・日蓮宗では、八月十三日に盆棚(精霊棚・オシヨウライ様)を飾ることで先祖の霊魂を迎え、十六日に片付けて川へ流すことで送り出します。西蒲区間瀬では、盆までに「精霊船(御精霊様)」をつくり、十六日にお供え物に乗せて海へ流す行事が行われています。



江南区木津のオシヨウライ様 (2018年撮影)

鈴木 彩也花

このように、年中行事は地域や家、宗派、時期などにより様々な違いがあります。ご自身の家や地域で行われている行事と比較しながらご覧いただければと思います。また、年中行事の思い出などを自由に書き込める「ぼくわたしの地域の年中行事」というコーナーも設置しました。是非、他の来館者の方と年中行事の思い出を共有してみてください。

(すずき さやか 学芸員)

歴史さんぽ

黒鳥兵衛の墓!?「緒立八幡宮古墳」

新潟市西区黒鳥

みなとびあのミュージアムシアターでは、「黒鳥伝説」を上映しています。CGや特殊メイクアップを駆使した迫力ある映像で、上映開始以来、その人気は衰えることがありません。蒲原平野を舞台に、大勢の手下を従えて悪事を働き、妖術をも使う黒鳥兵衛を、武将・源義綱が神のご加護とともに成敗します。切り取った黒鳥の首を埋めた場所が緒立八幡宮古墳の場所とされています。黒鳥兵衛は架空の人物ですが、源義綱は八幡太郎義家の弟で、実在した人物です。義家とともに「後三年の役」と呼ばれる戦に参加しています。

文化12(1815)年の小田島允武が書いた『越後野志』に次のような記載があります。「黒鳥兵衛尉詮任墓 蒲原郡弥彦荘緒立村ニ在、墳上ニ八幡神祠ヲ建之ヲ鎮、祠廟沼中ニ在、洪水陸ニ溢ルレドモ、祠中水ヲ増事ナク、大旱ニモ沼水減ズル事ナシト云フ」。黒鳥の墓とされる緒立八幡宮古墳の地は洪水でも水に沈むことなく、干ばつでも周囲の水が干上がることなかったようです。言い伝えですが……。

今日に「越後古図」と称される謎の絵図が伝わっています。絵図の時期として、康平3(1060)年、寛治3(1089)年など平安時代の紀年が記されていますが、実際には江戸時代の創作と考えられています。その特徴は蒲原平野に当たる部分が内湾状に水没した状態になっていることです。なぜこのような図が創作されたのかは未だに不明です。話の設定では、絵図の時期となる寛治年間に黒鳥は越後にいました。この絵図は黒鳥の時代の越後の様子を描いたものと言い換えることができます。おもしろいのは、絵図を見ると黒鳥の墓がある「黒鳥」の地が水没しないで残っていることです。言い伝えを反映しているの

でしょうか。興味がそそられます。緒立八幡宮古墳は径30mほどの円墳です。4世紀代の古墳とされ、新潟県内では例が少ない葺石が施されている有力者の墓です。この被葬者は黒鳥兵衛にかかわる人物ではありませんが、その古墳の威容に黒鳥の伝説が仮託されたのでしょう。

なお、この地は緒立温泉でも有名です。温泉水は「霊水」と呼ばれ、神社の社務所前から湧き出しています。現地の解説板によると、「霊水」は黒鳥兵衛が塩漬埋葬された所より湧いていると言われているとのこと。このあたり、パワースポットの予感がします。

小林 隆幸(こばやし たかゆき 副館長)



「寛治三年 越後古図」(当館蔵)部分拡大



緒立八幡宮 右奥が古墳、左の低い屋根の建物が「霊水」湧き出し口。

おすすめの1冊

にいがた医者の夜話

新潟に暮らし、出遇った人々、日々思ったことなどや体験したことなどが親しみやすい口調で語られています。新聞、俳句の会報誌、医師会報などに綴った随筆集です。「ねこさんという人」「油揚げと私」「もうひとりの河童医者」「心臓にツケ毛してウィーン」等々、目次を見るだけでも面白そうです。かつて日常だった新潟の様子や人々の人生が愛情を込めて描かれていて、若者の生の感覚が追体験でき、胸を打たれます。書き手の歯に衣着せぬ語り口調そのまま、伝わる文章のまさにお手本とすべき一冊でもあります。

著者の蒲原宏氏は大正十二年生まれの御年九十八歳。海軍軍医少尉を経て、医師として勤める一方、俳句は中田みずほ、高野素十に学び、新潟の俳句界を牽引してきました。さらに医学史、歴史、文化史も研究され、また、大正、昭和、平成、令和と変わりゆく新潟の町を見つけた体験を生かして、多くの講演、文筆活動をされています。今もなお、その好奇心は尽きることなく、仕事をこなし、まさにスーパーマンです。後進の灯として今後もご鞭撻いただきたいと願います。(大森 慎子 学芸員)



蒲原 宏 著 平成5(1993)年 新潟雪書房 発行